

木曾山脈南東部山村地域の変容^①

三浦 宏

研究の目的

最近におけるわが国の近代工業の著しい発展は経済地理上からみてひどい地域格差をつくりあげている。このため地域格差を是正して均衡のとれた国土の全体的発展を図るためにはどのような経済構造政策を打ち出せばよいかというところが、当面した大きな問題となっている。そして、そのような構造政策による地域改造以前の問題として、ゆきづまった農山漁村は否応なく、すではげしい変容をとげはじめている。こうした現象を正しく理解し、方向づけるためにはこの現象の直接的背景となっているこれら経済地域の変容の歴史を実証的に把握し、地域の性格を明らかにしておくことが必要と思う。地域変容の歴史やその上にみられる地域性の解明は構造改革上直接役立つかどうかは別としても、ゆきづまった山村を近代的に経済開発し、再構造する手掛りとなるとの考えにもとづきこの研究をすすめた。山村には従来はつきりした定義はないが、現実の山村民の生活をみると、行政上の区画単位に政治・経済・文化・教育などの諸活動を行っているとみられるので、ここでは山村を「山地に位置を占め、林業などを通じて山地資源によつて依存するとみられる行政上の村」という意味に使用し、木曾山脈南東部山村地域を対象として、その変容について地域的に検討を加えた。

I 対象地域の総観

研究対象地域はわが国の森林帯の水平分布からみると、年平均 6°C 、 13°C の範囲である温帯林（ブナ帯、本州中部）北海道南西部）の南縁に位置し、モミ・ツガ・ヒノキ・サワラ・スギ・ブナ・アカマツなどのほかクリ・コナラ・クヌギなどの雑木林が多く、一般に標高の高い尾根ぞいの官行造林地にはカラマツが目立っている。

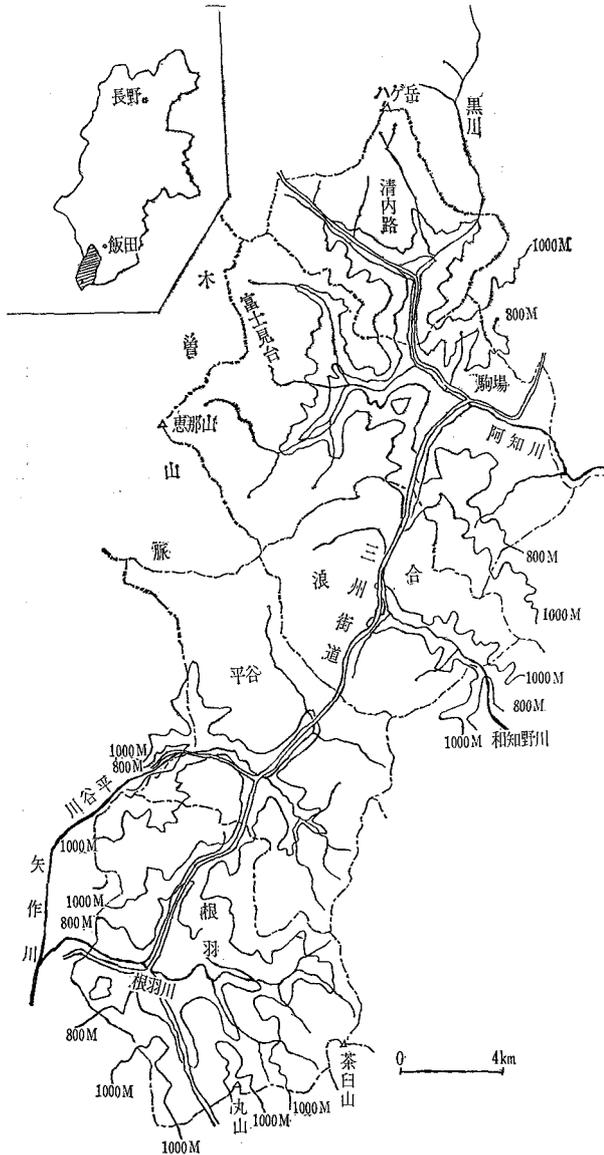
対象とした山村地域を(1)和知野川流域（浪合）、(2)矢作川上流域（平谷・根羽）、(3)黒川流域（清内路）の三流域に分けて考察した。このうち、黒川は阿知川^⑥の支流であり、和知野川とともに天竜川水系である。また、矢作川上流域・和知野川流域は三州街道（名塩国道）沿い山村であり、黒川流域は古来、物資輸送上重要な街道からはづれ、とくに隔絶性のつよいと推定される山村域である。次に三州街道沿い山村のうち浪合（盆地底標高 950m ）・平谷（ 920m ）は高冷地山村であるが、根羽（ 580m ）は高冷地山村とはいえない。清内路は下清内路（ 800m ）、上清内路（ 900m ）とに分れ、やはり高冷地山村である。（第1図参照）

II 地域経済の現状

(1) 林業への依存状況

専業兼業別農家数（第1表）をみると浪合・清内路には専業農家なく、平谷（一九五〇年には専業農家なし、六〇年には専業が七％）、根羽（専業率九％）も兼業農家が九〇％以上を占めている。兼業種別では第一種兼業より第二種兼業が多く、第二種の割合は根羽の五〇％を最低とし、平谷の八九％を最高としている。林業への兼業率をみると第一種兼業では六六％（平谷）―九五％（清内路）平均八二％、第二種では七一％（根羽）―七九％（浪合）平均七五％で第一種の方が林業との兼業率が高い。これは林業関係労働の農閑期における余剰労力利用性を示すものと考えられる。第1・2表からこの地域の林業への依存度の強さを推察することができる。この点を別の角度から検討する

第1図 研究地域の総観図



第1表 専業兼業別農家数 (1960)

村 別	浪 合		平 谷		根 羽		清 内 路	
	戸	%	戸	%	戸	%	戸	%
専 業	0	(0)	13	(7)	35	(9)	0	(0)
第 1 種 兼 農	88	(39)	9	(4)	164	(41)	95	(35)
第 2 種 兼 農	136	(61)	164	(89)	199	(50)	178	(65)
総 戸 数	224	(100)	187	(100)	398	(100)	273	(100)

第2表 農家の林業への兼業率 (1960)

村 別	浪 合		平 谷		根 羽		清 内 路	
	戸	%	戸	%	戸	%	戸	%
第 1 種 兼 農	88	(100)	9	(100)	164	(100)	95	(100)
賃 労 働 ・ 人 夫 日 雇	55	(62)	1	(11)	69	(42)	10	(10)
製 炭 ・ 製 薪	12	} (21)	5	} (55)	53	} (43)	76	} (85)
育 林 業 ・ 木 材 伐 出 業 等	7		0		17		5	
林 業 関 係 へ の 兼 業 率		(83)		(66)		(85)		(95)
第 2 種 兼 農	136	(100)	164	(100)	199	(100)	178	(100)
賃 労 働 ・ 人 夫 日 雇	93	(69)	50	(30)	70	(35)	53	(29)
製 炭 ・ 製 薪	8	} (10)	72	} (45)	62	} (36)	80	} (46)
育 林 業 ・ 木 材 伐 出 業 等	6		2		10		2	
林 業 関 係 へ の 兼 業 率		(79)		(75)		(71)		(75)

第3表 生産額構成の変化

		総生産額	農 産	蚕 繭 糸	工 産	林 産	その他
1935 (昭10)	浪 合	119,208	20,433	20,743	1,350	76,682	—
		100%	17.3	17.4	0.01	64.3	—
	清 内 路	117,205	11,382	65,184	955	38,738	946
		100	9.7	55.6	0.01	33.0	0.01
1940 (昭15)	浪 合	273,274	380038	88,169	3,800	143,267	—
		100	33	33	0.01	53.0	—
	清 内 路	294,392	89,781	89,781	3,355	185,620	502
		100	30.5	30.5	1.1	63.1	0.1
1949 (昭24)	浪 合	10,612,620	2,051,500	—	195,000	8,366,120	—
		100	20	—	0.01	79	—
	清 内 路	16,476,802	4,755,079	3,021,723	—	7,840,000	860,000
		100	29	18	—	48	5

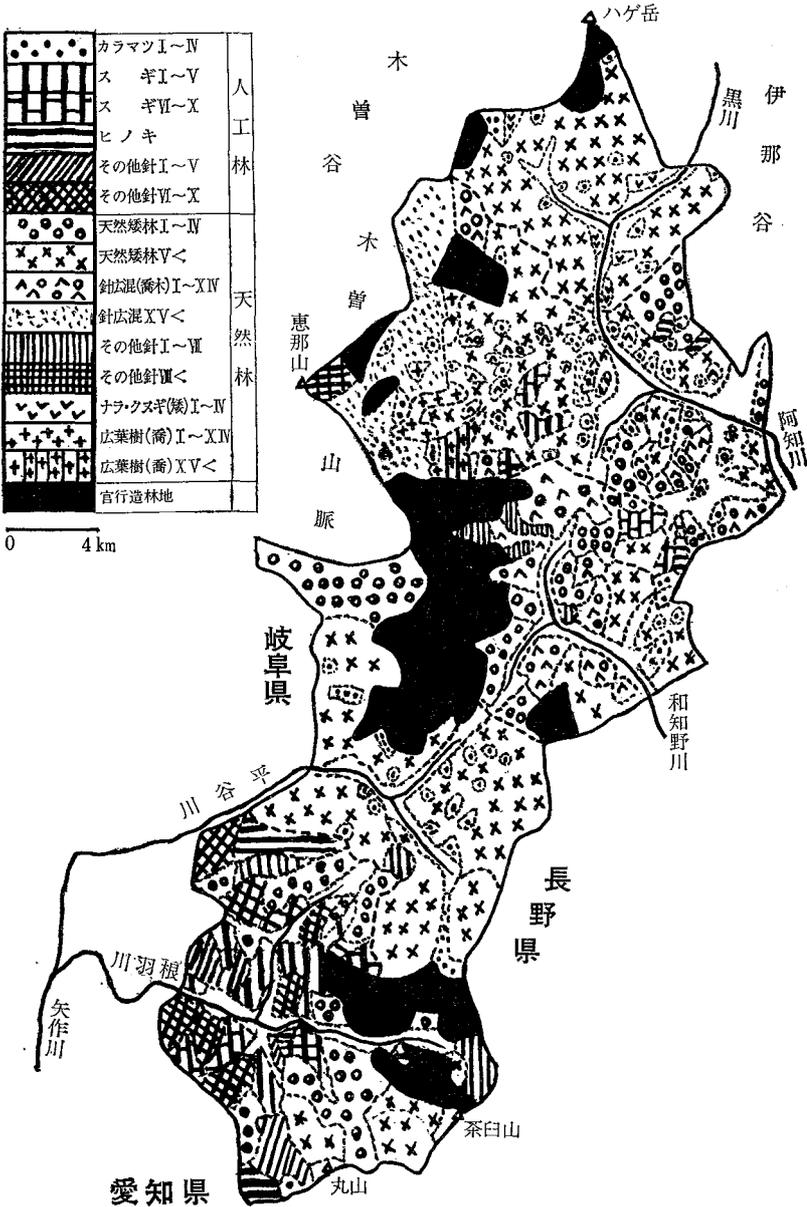
と第3表の如く、浪合・清内路の場合、戦前戦後を通じて林業生産への依存度のつよいことが判る。平谷は水田が多く桑畑少く、清内路はその逆であり、根羽・浪合は中間である。農産物の販売金額別戸数では平谷は五万円以上売上げある農家は三戸に過ぎず、根羽では六%、浪合では一%に過ぎない。清内路で比較的販売農家が多いのは養蚕・畑作との関係であるが、それにしてもほとんどが二〇万円以下である。清内路は米の生産はほとんど皆無といってよく、浪合、平谷は食料自給力三〜四カ月程度、根羽が約六カ月程度である。このようなわけであるから農業生産への依存度が非常に低いことが証明される。

(2) 林相

そこで森林資源の賦存状況が問題となるが、第2図の林相図(一九五四)をみると、矢作川上流の平谷・根羽および和知野川上流の浪合に官行造林地が目立ち、民有林では矢作川上流のうち根羽にはスギ・ヒノキその他針葉樹の人工的美林があり、これは天竜村(平岡・神原)、遠山村など愛知県、静岡と境を接する長野県最南の温暖多雨地域、および北信の山ノ内町付近に比較され、長野県屈指である。平谷、清内路では雑木の矮林(天然林)IV令級以上が広大な面積を占め、浪合の場合には加えてI〜II令級の矮林および針広混合林の幼令林の多いのが特色である。要するに、根羽は人工的美林に恵まれ、清内路、浪合、平谷は雑木の矮林、すなわち、薪炭林が多く、とくに浪合には幼令林が多い。それでは何故、このような森林資源賦存状態になったのであるか。

III 変容の過程

(1) 三州街道筋の山村



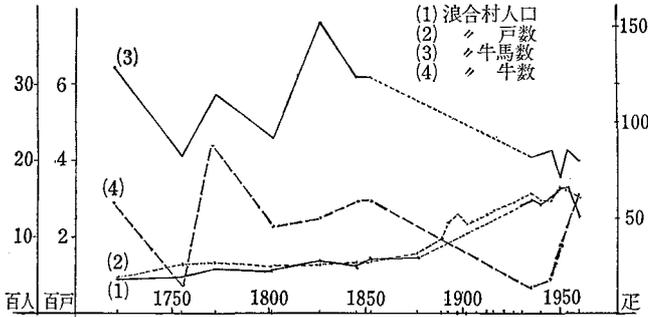
第2図 林相図

(A) 和知野川流域(浪合)^⑥

(i) 浪合村の林野の大部分は村有林で、個人有林はない。山林の樹令別樹種別蓄積(官行造林を除く、一九五五浪合農協調、これより新しい資料がないので同調査による)を見ると、適正伐期令ではないが、どの樹種も一応利用できる樹令(利用伐期令)を二〇年とおさえてみると、利用伐期令以上は林野総面積四、〇一一町歩の二一・八%、以下が六八・七%(一〇年以下の幼令林が四三%を占める)原野四・八%、伐採跡地四・七%である。

樹種別蓄積では雑が首位で七二%、カラマツ一五%、ヒノキ六・九%、ついでツガ、アカマツ、モミなどである。用薪材別蓄積では用材材の総蓄積に対する適伐以上の蓄積は一七%、薪炭林(広葉樹のみ)の場合で三一%であつて、用薪材林一町当り蓄積は九八石に過ぎず、全国平均(二四〇石)に対して四〇%に過ぎぬことがこの村の林業経営上の問題点である。官行造林地総面積一、一一四町、うち植栽四四九町(二〇〇%)、内訳ヒノキ四三%、サワラ一%、カラマツ五三%、雑木三%。カラマツ・ヒノキの蓄積が多く、総蓄積約一〇万石と推定され、一町当り二四五石でこれは全国平均なみの蓄積量を示している。

(ii) 江戸時代中期以降商品経済が発達し、中央高地と東海地方との物資輸送が活発になると三州街道(中仙道の脇往還)の交通運輸量が増加し、浪合もそれまでの素朴な自給自足経済を脱し、宿場としての体裁を整え、牛馬宿・旅人宿・休茶屋等の経営、人牛馬わらじ・まぐさ(カリヤス)の販売など宿場活動を通じ、また牛馬稼を通じ、交通運輸につよく依存する経済生活が展開し、明治中期におよんだと考えられる。その証拠の一端が浪合の牛馬頭数の累年変化に反映されている(第3図)。すなわち、牛馬頭数の変化の傾向をみると、筆者の調査の結果判明した範囲では、一七二二(享保七年)には牛五八頭、馬五〇頭計一〇八頭、以後幕末までに一〇〇頭を割るのは一七五五(宝暦五)



第3図 浪合における人口、戸数、牛馬数の累年変化

年の八二頭、一八〇一（享和一）年の九二頭の兩年で他の年は一〇〇頭以上であって、一八二六（文政九）年は一五二頭でピークをなしている。戸数との関係を見ると年により一様ではないが概ね一戸一頭内外である。一九三五（昭和一〇）年以降と対比すると人口・戸数の激増（二〜三倍）にかかわらず牛馬数の減少していることは江戸中期以降幕末までの街道依存性の端的な表現と解せられる。

(iii) 一八九〇（明治二三）年〜九四（明治二七）年に三州街道が県道として

改修され、道路の幅員が拡張されると運送（馬）車（荷積車）が出現した。初期の運送車は一〇〇貫積の小型、大正に入ると二〇〇貫積くらいになった。一駄三〇貫であつたから初期には運送車一台で三頭分強、大正期には七頭分弱の輸送が可能となつたので人牛馬の交通量が激減した。また馬追いかから牛馬車への転向には資本が必要で、荷馬一疋四〇円に対して転向には二〇〇〜三〇〇円の資本がかつた。これは馬追いにはなかなかの大金であつた。一方、米作にしても反当二〜四俵という低収量では農業への転進も魅力がなかつた。県道改修という交通因子の改善に伴い用材搬出が容易となり、産業革命期の需要と相俟って、事業家の稼行が盛んになると牛馬追いかから多くは山稼へ転向した。明治中〜末期がもっとも盛大な用材伐出の時期で、モミ・ツガ・ブナ・ミヅ・ヒノキが製材の対象となつたが、雑木は除外されたので、大正に入るとこれを対象とする製炭に移行したが、この時期はあたかも養蚕業の時期と一致した。一

九三七（昭一一）年頃には製炭の盛んな時期^④は過ぎていると考えられるが、同年総戸数三一七戸のうち製炭戸数の専業四三戸、副業一一三戸、合計一五六戸で約五〇%が製炭業に従事している。搬出等の関連労働を考えると、この村の大部分の人々が直接間接に製炭業と関係をもっていたと推測される。

(iv) 製炭業・養蚕業の盛んな時期を過ぎ、ゆきづまつてきた一九三五（昭和一〇）年以降離村出稼現象がおこる。一九三五↓四〇年の五年間に二〇戸・三二名減。別に三八（昭一三）年頃より渡瀧がはじまり南信濃郷（昭一七、智里・清内路・浪合・平谷・根羽五カ村の分村として成立）を軸として満州移民は合計一三三名におよんだ。太平洋戦争前後を通じて公私有とも乱伐されたが、とくに直後の復興ブームによる山景気は山林過伐のツメ跡を残して完全にゆきづまり、例えば、一九五三（昭二八）↓五五（昭三〇）年の間に合計九三名の出稼離村をみた。また官行造林への依存が大きく、一九五五年八月当時、官行造林の地拵え、下刈り等の作業に毎日五〇〜六〇名が通勤、中学卒業生も村内に残るものはほとんどない。一九二三（大正一二）年以來実施された官行造林の収穫がいよいよ開始され、分収歩合五分五分であるから、村の急場はこれによって救われつつある。

(B) 矢作川上流域（平谷・根羽）^⑤

(i) 前述の如く、矢作川上流域のうち、平谷は高冷地、根羽は異なるが、隣接する両村の林相に著るしい差のあるのは何故か——これが筆者の最初の疑問点であった。すなわち、根羽には人工の美林あり蓄積が多く、平谷には雑木の矮林が多く、カラマツの植林地が点在するに過ぎない。両盆地底では年平均気温↓根羽一二度C、平谷一〇度C、年降水量↓根羽二四〇〇耗、平谷二二五〇耗で根羽の方が高温多雨、森林繁茂の上から好適である。だが、これは盆地底附近の標高の低い地域の条件であって、スギなどの人工林には大きく作用しているが、山地をふくめて全体的にみる

と平谷も根羽も大差ない気候条件下にあるとみられる。地質土壤からみると丸山・茶臼山・池ノ平付近に玄武岩、第三紀層（凝灰岩、角礫岩、砂岩等）の分布がみられ、ほとんど花崗岩系からなる平谷よりも森林土壤が肥沃である。しかし、このような自然的因子の卓越性のみから根羽の森林を評価することは危険である。すなわち、長野県下屈指の根羽林業の理解にはその歴史的 성격の追求が必要である。

(ii) 根羽の林野は村総面積の九〇%（八、一〇六町）を占め林野のうち村有林野六八%、個人有林野三二%で、蓄積は五三%対四七%、二倍の面積をもつ村有林が個人有林の蓄積を僅か上廻るに過ぎない。また針葉樹林対広葉樹林面積の比率は村有林では一・六対一・〇、個人有林では三対一で、個人有林の方が村有林よりはるかに良質である。個人有林は三七六人によって所有され一町以下の所有者が六〇%、一〇町以上が二%弱（六人）で、この六人で全個人有林野の三〇%を所有支配、一町以下の零細所有者はわずかに一五%を所有するに過ぎない。よって村有林経営に重点がおかれ、一九五八（昭和三二）年六月村有林経営計画が確立し、個人貸付林、分収林の増加をはかり計画的森林経営に乗り出しつつある。第4表によって人口、牛馬数の変化をみると、明治初年の四二六頭の牛馬は総戸数二二一に對して一戸平均一・三頭に当り、家畜飼育の普及した今日、人口戸数の倍増に對して二七二頭に激減しているのは江戸中期↓明治中期に至る根羽宿を中心とした馬稼に依存していたことを無言で証明しているものである。江戸時代↓明治一〇年代に至る間の商品作物の中では葉煙草の生産を注意しなくてはならない。一八七七（明治一〇）年には畑総面積の $\frac{1}{3}$ が葉煙草畑であつて清内路とともに伊那谷南部の二大生産地であつたが、明治二〇年頃には養蚕業の發展におされて煙草畑は桑園に変化してゆく。こうした情勢の中で前述の三州街道改修がおこなわれ、産業革命期の木材需要と相俟ち、明治末までに急速な用材伐出が行われた。一八八八（明治二一）年、学校林に端を発する造林が愛知

第4表 根羽における人口、牛馬数
の変化

	人口	戸数	牛馬数
1876 (明9)	1,789	321	426
1911 (明44)	2,664	474	411
1932 (昭7)	2,677	521	249
1935 (昭10)	2,805	540	—
1940 (昭15)	2,823	590	—
1945 (昭20)	3,163	543	—
1950 (昭25)	3,114	580	299
1955 (昭30)	3,282	622	310
1960 (昭35)	3,114	620	272

している。すなわち、薪炭林は二〇—二五年輪伐で毎年七〇町歩ずつ皆伐、用材林は四〇—一八〇年輪伐としてヒノキ・サワラ・アカマツ・スギ・モミ・ツガを植林する計画を樹て、経営をはじめている。一九三五(昭和一〇)年の根羽村総生産額に対する蚕繭糸生産額の比率は一七%、林産額は四六・六%を占めているが、これは養蚕業、製炭業依存期の残象とみられる。また一九四〇(昭和一五)年頃の林業生産をみると用材は明治期の植栽からなる個人有林からのスギが大部分、ヒノキ・マツがこれについている。

(iii) 根羽の人口三、一一四人、山林八、〇〇〇町歩、田一〇四町歩(二毛作四町歩)、桑畑二二町歩、畑七八町歩に對して、平谷では人口一、二〇〇人(對根羽四〇%)、山林七、〇〇〇町歩(同八五%)、田四八町(同四六%)、桑畑二町歩(同二〇%)、畑一七町歩(同二二%)、桑畑、普通畑計一九町(同一九%)である。根羽に對する平谷の割合は人口四〇%、耕地三三%程度であるが、山林は八五%あり、人口、耕地の割合に山林は広大である。その上、前述の如

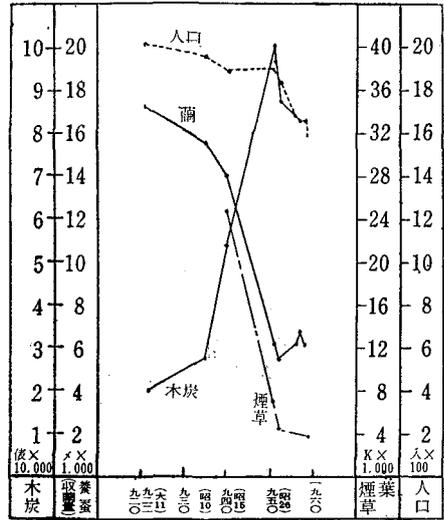
県稻武町(隣接)の古橋源六郎^⑧などの植林思想に影響されて、一九〇九(明治四二)年、村当局は根羽村基本財産条例を定め九五町歩に一六六年間継続事業として植林することに決めた。この思想が個人有林にも普及し実践されたことが、根羽民有林業成立の基礎になっている。用材伐出後の大正↓昭和初期は浪合・平谷などと同様の製炭業への依存期であったが、薪炭林伐採の対応策として一九二三(大正一二)年↓二四(大正一三)年に「村有林施業案」を作成し、村有林五、五〇〇町歩の内、比較的奥地一、二〇〇町歩を官行造林、その他を薪炭林と用材林に分けて経営する近代的な森林経営に乗り出

く自然的因子が森林繁茂上、根羽に劣ること、高冷地であるから農業生産に不利であることなどが、森林への極度な掠奪的生産の方向をとらしめた。平谷と根羽は同流域で隣接していながら通婚状態をみても関係うすく、根羽は愛知県との交流が盛んであるのに対し、平谷は浪合との統合度が強く、明治以来前後半世紀（五八年間）にわたって同じ行政村をつくっていた。このような事情で平谷は先進地たる三河林業の影響を受けること少く、浪合とともに森林伐後の計画的造林管理が行われなかったことが矮林の多い現状たらしめているのである。

(2) 黒川流域山村（清内路）^⑧

(i) 清内路の山林総面積三、九四七町のうち上下清内路区有林が五三・五%、個人有林が四一%、官行造林五%、国有林〇・五%の比率である。蓄積量は区有林五一%に対して個人有林四九%で、単位面積当り蓄積は個人有が僅かに上廻っているが、根羽の区有対個人有のそれが約一対二であるのには遠くおよびない。民有林における広葉樹林は針葉樹林面積の四倍強を占め、針葉樹の毎町当り蓄積は二三一石に対して広葉樹は一三〇石であるから、後者の場合、全国平均二四〇石に対して $\frac{1}{2}$ 強であって蓄積が極めて少い。年間生長量三三、六一八石に対して消費量四〇、一〇〇石（うち九〇%は薪炭用）で六、四八二石の過伐、しかも針広合計の適伐以上八八、七八九石（清内路森組調査）は二年余で消費される計算で、事実、今日まで適伐以下の幼令林も伐採され蓄積は年々減少の一途をたどっている。

(ii) 清内路における人口の推移と木炭・葉煙草生産量・収穫量との関係をみると、第4図に示す如く、養蚕業の衰退に伴って木炭の生産が急増してゆくことが極めて明瞭に把握でき、しかも養蚕業の盛期における生産力には製炭業および葉煙草生産力の結合にてもおよび、人口減退が目立っている。一九三五（昭一〇）年以後、満州移民として



第4図 清内路における生産額人口の累年変化

喬木村の内)、野熊山(現恵那山)付六カ村(上中関・備中原・大鹿倉・向関・昼神・小野川、以上現阿智村の内)とともに樽木成村であって、これらの村はいずれも山林資源への依存度のとくに高かった村である。

清内路は三州街道からはずれた隔絶性のつよい村であつたから、浪合・平谷・根羽の如く江戸時代から明治にかけて街道依存生活の展開はなかつたが、興味あることは早くから商品作物の単一栽培が行なわれて来たことである。葉煙草(清内路煙草)^⑩の生産が一七三六(元文元)年頃より本格的に行われ他地域(主として江戸)へ移出されて来たが、明治維新後やや衰退したので下伊那郡役所は一八八七(明治二〇)年、種子を下付し、改良方法を指示し、やや挽回した。同年の伊那谷における産額(葉煙草産額)は

南信濃郷・太古洞・中和鎮・千振開拓団・黒台信濃村等へ八八世帯が送り出され、別に青少年義勇軍としても離村し、満州方面への離村総数三五六名、実に総人口の二〇%におよんだ。いずれにせよ、主として葉煙草栽培・養蚕業に依存してきた清内路の経済は、有力な商品作物を失うと人口の減退現象をおこすが、最終的には山林資源への略奪的生産に依拠せざるを得なかつた。

下伊那周縁の高峻な山岳地帯には江戸時代を通じて、いわゆる樽木成(くれきなり)の村が存在したが、清内路も鹿塩・大河原(現大鹿村)、遠山(現上村・南信濃村)、小川・加々須(現

上伊那郡 三、〇一一貫六〇〇目（葉）

下伊那郡 三二、六三四貫七〇〇目（葉）

で、上伊那は下伊那の約 $\frac{1}{4}$ に過ぎない。伊那谷における当時までの産地は根羽・生田・清内路（以上、下伊那郡）、南向・中沢（以上、上伊那郡）の五カ村であったが、明治二〇年頃には清内路を除き箕園（葉煙草畑）は桑園化されてしまうので、この下伊那の産額の大部分は清内路産とみて差支えない。この頃の清内路における煙草畑は一〇〇町歩におよんだといわれるから、ほとんど全耕地に煙草が作付され、完全な単一生産であったことが判る。一八九八（明治三二）年煙草の専売制が布かれてから衰退が決定的となり、一九〇九（明治四二）年生産停止、当時漸く活況を呈して来た養蚕へ移行してゆく。この間にあって明治中期↓末期に浪合・平谷・根羽などと同様、用材林の伐出が行われ、黒川などを利用して搬出されたが、ここでは葉煙草↓桑（養蚕業）と有利な商業的作物の単一栽培がづくため造林に熱意がなかった。

(iii) 証券炭窯場制度―炭窯をつくる便宜上、証券によって区有林の地上権を個人が支配する制度―が一八七七（明治一〇）年↓一九二六（大正一五）年の半世紀の間実施され、区有林の一部を分割して一戸に一箇所の証券炭窯場を与え、個人の意志によって、原木の生長量と製炭量の均衡をとらしめようとした。しかし、地上権売買の自由を認めたので、均衡が破れ支配面積に広狭の差があらわれた。一九二六（大正一五）年以降、村ではこの方式をやめて原木の消費と育成を計画化しようとしたが、一九三五（昭和一〇）年以降、養蚕業の衰退にともなう製炭量は増加の一途を辿り、計画的林業経営は不成功に終わった。戦後、薪炭林は競売制度となったが、競売窯場の跡は樹木より勢のよい笹山となって荒廃しがちな状況下にある。

IV 結 び

以上、木曾山脈南東部山村地域を対象として、山村の現状と変容の過程にみられる地域的な差異を流域別に研究してみた。

これを要するに、近接した山村地域であるから概ね同じように変容し、類似した現況下にあるけれども、微細にみると矢作川、和知野川・黒川三流域別にそれぞれ異ったニュアンスをもって発展して来ていることが判り、また三州街道（名塩国道）というような歴史的な輸送路に沿っているかどうかは地域の変容上重要な意味をもっていることがわかった。

(1) 三州街道筋の山村では江戸時代中期から明治中期までは、中馬街道が村々を連珠状に貫いていたので、その交通の機能（中馬榦・宿場活動）を軸として街道の交通量への依存を中心とする経済構造であった。

(2) 明治中期以降、街道の改修（人牛馬の交通量の減少）、鉄道の開通（中央線の開通）などによって街道への依存が不可能となり、明治時代末期に至るまで天然林からの用材伐出が盛んに行なわれたが、この時期に隣接の三河林業の影響をつよくうけた根羽では計画造林が早くも行われ、地質・気候などの自然的因子の卓越性などあいまって、略奪的乱伐の禍根を未然に防ぎ、根羽民有林業成立の基礎が培われた。

(3) 根羽と同じ矢作川流域でも平谷は和知野川上流浪合と隣接し同性質をもつ高冷地山村で行政的にも明治以来約半世紀にわたって共同の自治体をつくって来た。この両村は根羽と異り積極的な造林管理が行われなかった。

(4) 用材伐採の対象は主に針葉樹であったから大正↓昭和初期にかけて、広葉樹を対象とした製炭業が浪合・平谷・根羽とも盛大に行われ、ここに山村特有の略奪経済に近い林業生産が展開したが、同時にぼつ興して来た養蚕業へも

つよく依存する結果となった。根羽では造林が絶えず進行したが、浪合・平谷では停滞した。ただこの地域共通に官行造林が一九二三（大正一二）年以来盛んに行われ、これが現在とくにゆきづまっている浪合・平谷の急場を救っている。

(5) 黒川流域では江戸時代中期から明治中期まで葉煙草の単一栽培が行われ、明治中期から末期までは三州街道筋山村地域と同じく、用材伐採、大正から昭和初期にかけては製炭業、養蚕業への依存期であったが、これらの時期を通して計画造林はほとんど進行しなかった。

(6) 全地域とも一九三五（昭和一〇）年以降養蚕業不況となるや製炭業を中心とする略奪的林業生産への依存が高まったが、人口流出現象もおこった。

(7) 太平洋戦争を契機とする乱伐はこの山村地域に致命的な打撃を与えているが、とくに農業生産への依存度の低い地域ほどひどい。根羽は計画造林が実施された結果、スギ・ヒノキ・サワラ等の人工美林を保有し長野県下屈指の民有林業地として比較的安定しているが、浪合・平谷・清内路には人工美林なく、とくに清内路は高冷畑作地域のためもっとも不安定な地域となっている。

(8) 従って、これらの地域にもっとも要求されるものはかつての街道の交通量、葉煙草生産、養蚕業、用材生産、製炭業に匹敵するような生産業の導入の他、近代的林業経営の確立にあるが、林業経営については別稿にゆずる。

（一九六三、一〇、二八）

参考文献および註

① 一九六三、日本地理学会秋季大会において要旨の一部を報告した。

② 福宿光一…山村の諸類型(三省堂教授資料一、二号、一九六二、別刷)には山村を一応山地にある集落とし、行政上の町村単位でなく、いわゆる「字」あるいは「部落」程度の小単位とした場合どのような機能をもっているかを、経済活動を通じて、木地屋集落・林業集落・製炭集落・河谷斜面集落・高冷地集落・出作り集落などと分類してある。

③ 三浦宏…下伊那地方山村における林業の地域的研究(長野県学校科学教育奨励基金、第一回奨励研究レポート、一九六一)

④ 千葉徳爾…信州地域における農業集落の高度限界について(信大教育学部紀要八号、一九五九)

⑤ 三浦宏…三州街道沿い山村浪合の発展過程(信濃—信濃史学会機関誌—七卷、九号)

⑥ 古島敏雄…信州中馬の研究および江戸時代における商品流通。

⑦ 三浦宏…三州街道筋山村の変貌過程(信濃四卷、一一号)および三州街道筋村落の変貌過程(1)―旧村上中関の場合―(地理評二五卷別冊(2)講演要旨、一九五二)

⑧ 減少の理由は、これだけでなく中央線の開通など鉄道開通が勿論大きな要因である。

⑨ 福宿光一…わが国における製炭時期の諸型式の分布(立正大学文学部論叢第五号抜刷、一九五六)

⑩ 三浦宏…矢作川上流林業の地域的研究(信濃一〇卷、九号、一九五八)

⑪ 尾留川正平…林業(経済地理—新地理学講座(6) 朝倉書店)

⑫ 福本和夫…新旧山林大地主の実態(東洋経済、一九五五)

⑬ 三浦宏…黒川流域林業の推移とその性格(信濃一三卷、七号、一九六一)

⑭ 三浦宏…天竜川中流域山村の地域性に関する若干の考察(新地理八卷、一号)。

⑮ 三浦宏…赤石谷遠山地方における森林資源と利用および経営について(新地理四卷、一一号)。および(日本地理学会、一九五四 秋季大会講演要旨)

⑯ 三浦宏…山林開発上からみた南伊那山村和合の展開(信濃九卷、六号、一九五七)

⑰ 幸田清喜…白峰村の出作り(現代地理学講座(三)、二八六頁)。葉煙草の生産は黒川流域における出作り耕作の契機となった。

前掲⑬参照。